病中雑記

芥川龍之介

一　毎年一二月の間(かん)になれば、胃を損じ、腸を害し、更に神経性狭心症(けふしんしやう)に罹(かか)り、鬱々として日を暮らすこと多し。今年(ことし)も亦(また)その例に洩(も)れず。ぼんやり置炬燵(おきごたつ)に当りをれば、気違ひになる前の心もちはかかるものかとさへ思ふことあり。

二　僕の神経衰弱の最も甚(はなはだ)しかりしは大正十年の年末なり。その時には眠りに入らんとすれば、忽ち誰かに名前を呼ばるる心ちし、飛び起きたることも少からず。又古き活動写真を見る如く、黄色き光の断片目の前に現れ、「おや」と思ひしことも度たびあり。十一

年の正月、ふと僕に会ひて「死相(しさう)がある」と言ひし人ありしが、まことにそんな顔をしてをりしなるべし。

三　「墨汁一滴(ぼくじふいってき)」や「病牀(びやうしやう)六尺」に「脳病(なうびやう)を病み」云々(うんぬん)とあるは神経衰弱のことなるべし。僕は少時正岡子規(まさをかしき)は脳病などに罹(かか)りながら、なぜ俳句が作れたかと不思議に思ひし覚えあり。「昔を今になすよしもがな」とはいにしへ人の歎きのみにあらず。

四　月余(げつよ)の不眠症の為に○・七五のアダリンを常用しつつ、枕上(ちんじやう)子規(しき)全集第五巻を読めば、俳人子規や歌

人子規の外に批評家子規にも敬服すること多し。「歌よみに与ふる書」の論鋒破竹の如きは言ふを待たず。小説戯曲等を論ずるも、今なほ僕等に適切なるものあり。こは独り僕のみならず、佐藤春夫も亦力説する所。

五　子規自身の小説には殆ど見るに足るものなし。然れども子規を長生せしめ、更に小説を作らしめん乎、伊藤左千夫、長塚節等の諸家の下風に立つものにあらず。「墨汁一滴」や「病牀六尺」中に好箇の小品少からざるは既に人の知る所なるべし。就中「病牀六尺」中の小提灯の小品の如きは何度読み返しても飽かざる

心ちす。

六　人としての子規(しき)を見るも、病苦に面して生悟(なまざと)りを衒(てら)はず、歎声を発したり、自殺したがつたりせるは当時の星菫(せいきん)詩人よりも数等近代人たるに近かるべし。その中江兆民(なかえてうみん)の「一年有半(いうはん)」を評せる言の如き、今日(こんにち)これを見るも新たなるものあり。

七　然れども子規(しき)の生活力の横溢(わういつ)せるには驚くべし。子規はその生涯の大半を病牀(びやうしやう)に暮らしたるにも関(かかは)らず、新俳句を作り、新短歌を詠じ、更に又写生文の

一道をも拓けり。しかもなほ力の窮まるを知らず、女子教育の必要を論じ、日本服の美的価値を論じ、内務省の牛乳取締令を論ず。殆ど病人とは思はれざるの看あり。尤も当時のカリエス患者は既に脳病にはあらざりしなるべし。（一月九日）

八　何ゆゑに文語を用ふる乎と皮肉にも僕に問ふ人あり。僕の文語を用ふるは何も気取らんが為にあらず。唯口語を用ふるよりも数等手数のかからざるが為なり。こは恐らくは僕の受けたる旧式教育の祟りなるべし。僕は十年来口語文を作り、一日十枚を越えたることは

（一枚二十行二十字詰め）僅かに二三度を数ふるのみ。然れども文語文を作らしめば、一日二十枚なるも難しとせず。「病中雑記」の文語文なるも僕にありてはやむを得ざるなり。

九　僕の体（からだ）は元来甚だ丈夫ならざれども、殊にこの三四年来は一層脆弱（ぜいじやく）に傾けるが如し。その原因の一つは明らかに巻煙草を無暗（むやみ）に吸ふことなり。僕の自治寮（じちれう）にありし頃、同室の藤野滋（ふぢのしげる）君、屢（しばしば）僕を嘲（あざけ）って曰（いはく）、「君は文科にゐる癖に巻煙草の味も知らないんですか？」と。僕は今や巻煙草の味を知り過ぎ、反（かへ）って

断煙を実行せんとす。当年の藤野君をして見せしめば、僕の進歩の長足(ちやうそく)なるに多少の敬意なき能(あた)はざるべし。因(ちなみ)に云ふ、藤野滋君はかの夭折(えうせつ)したる明治の俳人藤野古白(ふぢのこはく)の弟なり。

十　第一の手紙に曰(いはく)、「社会主義を捨てん乎(か)、父に叛(そむ)かん乎、どうしたものでせう？」更に第二の手紙に曰(いはく)、「原稿至急願上げ候。」而して第三の手紙に曰(いはく)、「あなたの名前を拝借して××××氏を攻撃しました。僕等無名作家の名前では効果がないと思ひましたからどうか悪(あ)しからず。」第三の手紙を書ける人はどこの

誰ともわからざる人なり。僕はかかる手紙を読みつつ、日々腹ぐすり「げんのしやうこ」を飲み、静かに生を養はんと欲す。不眠症の癒えざるも当然なるべし。

十一　僕は昨夜の夢に古道具屋に入り、青貝を嵌めたる硯箱を見る。古道具屋の主人曰、「これは安土の城にあつたものです。」僕曰、「蓋の裏に何か横文字があるね。」主人曰、「これはジキタミンと云ふ字です。」安土の城などの現はれしは「安土の春」を読みし為なるべし。こは寧ろ滑稽なれど、夢中にも薬の名の出づるは多少のはかなさを感ぜざる能はず。

十二　僕の日課の一つは散歩なり。藤木川（ふぢきがは）の岸を徘徊（はいくわい）すれば、孟宗（まうそう）は黄に、梅花（ばいくわ）は白く、春風（しゆんぷう）殆（ほとん）ど面（おもて）を吹くが如し。偶（たまたま）路傍の大石（たいせき）に一匹の蝿（はへ）のとまれるあり。我家の庭に蝿を見るは毎年五月初旬なるを思ひ、茫然（ばうぜん）とこの蝿を見守（みまも）ること多時、僕の病体、五月に至らば果して旧に復するや否や。

（大正十五年二月—三月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。